

平成 22 年 4 月 20 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19530565

研究課題名(和文) 制限環境下における自己の適応と余暇活動

研究課題名(英文) Self-adjustment and leisure activity in the restricted circumstances

研究代表者

片山 美由紀 (KATAYAMA MIYUKI)

東洋大学・社会学部・准教授

研究者番号：50265229

研究代表者の専門分野：社会心理学

科研費の分科・細目：3901

キーワード：ワークライフバランス、少子化、余暇、適応、心理学、制限環境、自由時間

1. 研究計画の概要

研究計画は次のようであった。

初年度(平成19年度)は文献調査及び問題の発見と共有。2年目(平成20年度)は第1調査(制限環境下にある対象者の方々への聴き取り調査)、第2調査(大学生対象)、第3調査(有識者対象)、第4調査(国内外研究情報調査)。3年目(平成21年度)は全国サンプリング調査(調査会社の用意している、オムニバス形式調査を利用)。4年目(平成22年度)は成果のまとめと成果発表、報告書作成、および社会への還元。

2. 研究の進捗状況

当初の計画に沿って、3年目までの研究が終了している。

初年度の問題の整理の過程で、主観的制限環境の認知において日本文化の特徴が影響していることが得られ、2年目には4種類の調査を行い、制限環境の問題がひいては少子化の問題につながることを示唆された。制限環境の制度的側面のレビューを行う過程で、一般に先進的とみなされる北欧モデルと対極の南欧福祉モデルの可能性について、資料

収集および考察が深まった。統計的数値や調査数値だけでは確証の得がたい南欧の実態部分は、この1年の間に知己を得た複数のイタリア研究者らへのインタビューにより妥当性検討を進めた。

3年目にはここまで得られた知見に沿って、インターネットを利用した、国際比較調査を行った。対象国は、少子化の進む典型的な国々、日本・イタリア・韓国であった。

なおこの時点までの研究のなかで、人が制限環境を経験して適応困難を生じる場合に、その変化の契機として、本人自身の内的な変容があるとともに、本人をとりまく周囲の人々の行動一圧迫を取り除くような配慮的行動また育児協力・料理・家事などの協力的行動一が本人に、日常可能な行動範囲そして意識範囲の制限解除とともに適応的变化を生じさせることが明らかになった。そのためこの変数も調査設計に加えられた。男女ともに、ワークライフバランスの見直し、事態全体の改善につながることを示唆された。またこのことが少子化問題の解決に寄与することも示唆

された。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

研究作業は当初の計画通りにすすんでいるが、1年目および2年目の研究成果により、研究成果の社会的還元をみすえた研究内容につき、当初想定よりも深い内容で考察を行うことができた。その視点に従い、日本国内のみならず、日本・イタリア・韓国の良質なデータを3年目に取得することができ、また思わしいデータが得られている。

4. 今後の研究の推進方策

既にこの3年間に取得した多数の資料・データについて分析を行う。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

1) 片山美由紀, 自由時間の過ごし方解明のための心理尺度の作成－休息の意義を共有する社会風土醸成のために, 東洋大学社会学部紀要, 47(2), 2010, pp. 45-57.

2) 片山美由紀, 食事準備行為の国際比較 (EUROSTAT) からみたワークライフバランスと少子化, 現代社会研究, 7, 2010, pp. 13-24.

3) 安藤清志, 否定的自称の経験と愛他性, 東洋大学社会学部紀要, 47(2), 2010, 35-44.

4) 片山美由紀, 「自由時間のあり方」の基礎的整理と社会心理学－ワークライフバランス概念ではみえにくい部分－, 東洋大学社会学部紀要, 46(1), 2009, 49-63.

[学会発表] (計1件)

[図書] (計3件)

1) 安藤清志 (編著) 自己と対人関係の社会心理学, 2010, 北大路書房, 152pp

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]